

第 6 章

兄弟，家族，親族が³見た石川 馨先生

6.1 兄を語る

兄 石川 馨先生と私

石 川 潔

兄貴石川 馨と私は年も近いし，旧制高校，大学と同じコースを進み1年違いで卒業した。そのためか学生時代から，しょっちゅう間違えられていた。

大学時代は担当教授から間違えられて，2学年の私に3学年の卒論の話を小便をしながらされてあわてたり，終戦後，東京駅等で兄貴の弟子の学生から挨拶をされたり，後年になってからは，大企業のトップの人達から列車の中などで，石川先生と言って丁重な挨拶を受けたり，間違えられたことは数えきれないほどある。幸いにして，すぐそばに住んでいたけれど，女房共には間違えられたことがない。

近年，年をとってきたので，死ぬ時も似ているのではないかと，気になっている。

3～4年ほど前に兄貴が最後の病気になり，一時回復した時に，ここで用心

すれば寿命が長くなるだろうと大分忠告をしたが、逆に意地をはって、用心が不十分だったせいか、2年前に突然他界してしまった。父より10年以上、母より6～7年短命であった。

私も似たような事になってはいけなないと、気を付けていたつもりだったのに、兄貴の最後と同じ脳内出血におそわれてしまった。幸い軽症で現在リハビリ中だが、少なくとも兄貴よりも長生きしなければ、さらに父母の年までなんとか健在でなければ申しわけがないと思っているが、兄貴に似ていることが、どのくらい影響するかわからない。

兄貴は自分の体については頑固で、家族、弟達の言うことをほとんど聞き入れなかった。大企業の社長さん方に、「社長が、1カ月や2カ月留守にしたり病気をしたりしても困らないようにしていなければいけない」と苦言を呈していたのに、自分が病気をした時は、死ぬ2週間くらい前に大学の卒業式および入学式にどうしても出席すると、強引に出席し、その後倒れてしまった。

弟の身びいきかもしれないが、兄貴は昭和20年代に統計的品質管理を学び、鉄鉱石および原料炭のサンプリング法を研究開発し、製鉄業の合理化に努力したのを手始めとして、QCサークル活動、TQCの理念確立等を全産業に推進した。その結果、日本経済の競争力が格段に強化された。この意味で兄貴は現在の日米経済摩擦の日本側の黒幕の一人であったと信じている。

人生の最後だけは真似をしないで少しでも長生きしたいが未だ兄貴より1年永いだけだ。はたしてどうなるか。

(次弟、三菱石油取締役会長)

馨兄さんの思い出

石川 誠

馨兄さん、いずれは誰かが順次にあの世に行くとしても、あまりにも早すぎた。まだ、少なくとも10年位は大丈夫だと思っていたのに残念だ。兄さんが居なくなって何か石川家の中心がなくなってしまった。勿論蕙子姉さんが替って石川本家を守っておられるが、我々の心の中が、何事も兄さんを中心に動いていた所為かも知れない。まあ仕方がない。天国からあたたかく見守って下さい。

社会人になってからの事は皆さんが色々と書いて下さると思うので、私は幼い頃の兄さんについての思い出を二、三書いてみよう。

子供の頃、私は小生意気だったのか、上3人の末っ子として我儘だったので、潔兄さんに何かと突掛かる。潔兄さんとしても何時も我慢し、いい加減にあしらっているのだが、ついに我慢が出来なくなって私をとっちめる。私は必死になって抵抗するのだが、どうしても兄貴に負けて組敷かれてしまう。そうすると馨兄さんが出てきて仲をさいて私を助けてくれる。私は潔兄さんに憎まれ口をたたきながらもほっとして、助かったと思った。

馨兄さんが高師の附属中学に入って最初の夏の時、学校の制服の白ズボンが私の子供心にもスマートに見えた。馨兄さんの得意そうな顔を思い出す。

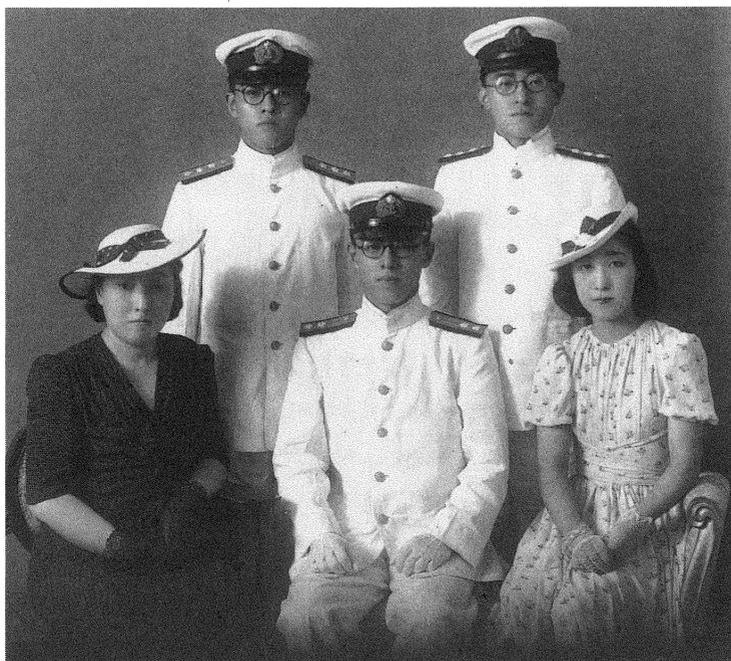
また、その頃滝野川の家裏に運動場があり、そこに機械体操用の鉄棒があり、下は一応砂場になっていた。そこで馨兄さんが学校のための練習をしていたらしいが、へまをして落っこってしまった。その時に歯で下顎を切って何針も縫った。その跡はずうっと後まで残っていた。その時お袋が大変心配していた。また、この事件のために早速この鉄棒は取り払われてしまった。そのためもあると思うが、潔兄も私も鉄棒が下手だ。

何しろ馨兄さんは努力家で何時でもコツコツ勉強していた。これは一生を通じてやり通し、兄さんの成功の基本であったと思う。

大人になってからの思い出をひとつだけ。

戦時中、昭和17年7月だったと思うが、私が九州の海軍第4燃料廠から、南方ボルネオの海軍燃料廠に転勤することになり、一回東京に帰宅した後、呉から軍用船に乗り出航するという事になった。その時お袋の提案で、3兄弟が集まって見送ることになり、既に予備役に入っていた馨兄さんはこの年の春結婚した蕙子姉さんと一緒に九州の若松から、現役の潔兄さんは徳山の海軍燃料廠から、共に海軍の白い夏の軍服を着て、またお袋は東京から私と一緒に、徳山の水交社に集まった。そして夜中になって皆で写真を撮っておこうという事になり、町の写真館を何軒か尋ね、やっとそのうちの1軒が無理に起きてくれ、写真を撮ってくれた。3人の白の軍服に囲まれ、また蕙子姉さんも白い洋装だったと思うが、お袋は本当に嬉しそうであった。もっとも私のお別れの写真だったが、

(三弟、鹿島道路特別顧問)



前列左から母富美子、誠、蕙子
後列左潔、右馨(1942年、徳山にて)

兄 石川 馨を偲んで

石 川 六 郎

兄は私達9人兄弟(男8人, 女1人)の長男, 石川家の嫡子として, 文字どおり両親, 兄弟, 周囲の人達の期待と信頼を一身に担って成長した。

兄が東大の応用化学科に合格したという通知が, 当時工学部教授であった関雄伯父からあった時, 偶々在宅していた両親が涙を流して喜んだのを鮮明に記憶している。他の兄弟の場合にはこのような例が一回も無かったことと比べて, 両親がいかに兄に期待していたかを窺い知ることが出来る。

男子が多かったせいもあり, 両親は長男を弟妹達の範として理想的に育てることにより, 家庭内の秩序を保とうとしたようである。兄はその期待にそむかず, 順調に成長し, 極めて優秀な成績で学業を終え, 社会人となり, 当時男手ばかり多かったわが家に, 美しく, 温かい, 聡明な奥さん(蕙子未亡人)を迎え, 幸福な家庭を築いた。

東大卒業後, 父の社業をつぐため, 当時の国策にそって「石炭液化による人造石油製造」を目的としてドイツから技術導入を行っていた日産液体燃料株式会社に就職した。そして海軍短期現役技術将校を退役後, 母校の東京大学の要請で, 同大学の助教授となった。

その後, 品質管理の権威として学会と産業界との懸橋となって活躍したが, 私は兄の性格, 才能から見て, 実業界で通したならば, 経営者としても大成功をしたのではないかと思う。

兄は家長として, 冷静に, 公平に, 合理的にそして善意をもって周囲の人々に接し, 皆から敬愛の情をこめて慕われた。また, 極めて緻密で, 勤勉な性格で, 学生時代に写真に凝り, 当時では珍しかった独製のローライフレックスを使い, 暇さえあれば暗室にこもり, 現像, 焼付, 引延ばし, トリミングに熱中し, 丹念に立派なアルバムを作るなど, 身の回りの整理, 整頓は, 私どもから

見て、驚異の的であった。

私が鹿島建設の社長に就任(1978年)した際、約140年間の歴史の中で醸成されてきた弊害を取り除き、会社を活性化させ、風通しを良くするため、TQCの導入を行ったが、兄の強力な指導と助力によって大成功し、5年後にデミング賞実施賞を受賞、会社の体質改善と業績の飛躍の向上を達成することが出来たのは、兄のお陰とあらためて感謝の念をもって想起している次第である。

(六弟、日本商工会議所会頭・鹿島建設代表取締役会長)

馨お兄様の思い出

石川清子

石川家の七男七郎の嫁として石川家に入りました私にとりまして、馨お兄様はずっと年上の偉い人として存在していらっしゃいました。夫七郎の長兄で、日科技連の大先輩として、いつも七郎を通して、そのお仕事に対するすばらしいバイタリティーのお話を伺っておりました。また、蕙子お姉様の貞淑なお仕え振りにはいつも感服致しており、お兄様の行動に合わせることを第一になさるご夫妻の在り方は模範的な姿として私のお手本でございました。

子供達が小さい頃、夏の軽井沢で一緒に休暇を過ごしました。ある夏、日科技連の先生方もお泊まりになられた時、昼間は品質管理のお勉強やゴルフだったのでしょうが、夜はお酒が入って、皆さんで、色々な歌を次々に歌い、曲を忘れた人は音痴、歌詞を忘れた人は歌詞痴などと云って楽しく過ごしたことを思い出します。

その頃も、その後も馨お兄様とは、間に七郎と云うクッションを置いてのお付き合いが殆どでしたが、1980年、不幸にして七郎が不治の難病にかかりましたから、私は直接お兄様の手にはすがらねばなりません。石川の両親は既に亡く、馨お兄様は親代わりとして、七郎の主治医新島端夫先生からのガン告知を私に知らせるか否か、兄弟、ご親類でご相談の上、教えて下さったのです。

忘れもしません。お忙しい中をホテルニューオータニでお会い下さって、この重大なお話を、清子なら耐えられると、敢えてきかせてくださいました。そのお兄様のお心に応えられるよう、私は、涙を仕舞い込んで秘かにガンと戦う決心をしました。それからの三年間、馨お兄様のお力添えで最新の治療を受けさせて頂き、主治医のお話では、七郎は半年位の命と云われながら、入退院を繰り返しながらも、長女の結婚、初孫の誕生迄見届けて、痛みも無く過ごし、1983年他界しました。七郎には最後までガン告知は云わずじまいでしたので病気のことを胸に秘めながらお見舞い下さり、励まして下さるお兄様方のお心を本当に有難く思いました。兄弟の深い愛情を持ちながら、科学者として冷静に病気を見つめ、適切なアドバイスをして下さいましたこと、一番辛い時期に頼れるお兄様がいらっしゃったこと、本当に感謝いたしております。それなのに思いがけないご逝去に、なぜと云う思いを拭き切れません。本当に残念でなりません。でも、あの世で馨お兄様は七郎とQCのお話でもしていることでしょう。

(七弟、故 本州製紙常務取締役石川七郎夫人)

馨兄貴を偲んで

下 条 進一郎

私が馨兄貴に始めてお目にかかったのは、家内と見合いをした昭和23年の秋であった。第二代厚生大臣故広瀬久忠氏のご紹介で見合いをした後、石川家の長男である馨兄が一家を代表して彼の妹である裕代をつれて私と三人でお茶を飲み誘われたが、実際は私の首実検であって、どうにかパスしたらしい。それが先生とおつき合いの始まりであった。若い頃から学究肌で堅実型のお人柄であったが、また大変に妹思いの心優しい一面もあった。爾来結婚して身内のつき合いとなり、よく一緒に酒を飲み交したり、ゴルフをやったりしたことが走馬灯のようになつかしく思い出される。彼の人間像の中には、父親の石川一郎初代経団連会長と母富美子さんの厳しい家庭教育が染込んでいたように

思う。財界名門の家に育ったにも拘らず、万事質素を旨とされ、偉ぶらない謙虚な態度には誰しも好感をもち、敬愛の情で接する人格者であった。

大学卒業後、時局柄海軍2年現役技術士官として奉公されたが、海軍士官時代の口ぐせが残っていて、戦後相当経っても人前で誰に対しても人を呼ぶのに「貴様」「貴様」を連発されるのには閉口した。先生はこよなく酒を愛し、酒量もかなり嗜まれる酒豪であったが、酔いが廻るにつれて例の「貴様」の数が多くなって談論風発とどまるところを知らない。ただ酔うほどに呂律が廻らなくなってくるので、そうでなくてももともと言語不明瞭の方であるから益々何をいっておられるか判らなくなってしまうのだが、それでも談論はやまない。

先生の特筆されるべき業績は何といってもQCの研究を畢生の使命と心得て、QCの研究とその普及徹底のために一生を捧げられた事であろう。日本の産業が強い国際競争力を持つに至ったのも、先生の品質管理面での経営指導が大きな原動力となっていたのであり、国内のみならず欧米諸国の主要企業からも絶大な評価を受けていただけに、先生の他界はかえすがえすも惜しまれてならない。生真面目な性格からQC指導のために東奔西走され、さらに夜おそくまで勉強されて、おまけに大変なヘビースモーカーだったので、自ら体をいたわることをされなっただけに、何時しか体調をこわされたのではないかと思う。亡くなられる少し前に軽井沢でゴルフをご一緒したことがあったが、その時はスコアもすぐれず、それ以降は急坂を下りるように病状が進んでいったようだった。私にとって大事な兄であり、国にとっても有為な碩学である石川 馨先生の早すぎる他界はまことに惜まれる。心からご冥福をお祈り申し上げます。

(妹裕代の夫、参議院議員・前厚生大臣)

兄 馨先生のこと

石 川 八 朗

馨兄は私の15歳年上の長兄であり、また大学も同じ工学部応用化学科の先輩で、しかも大学で実験計画法の講義を受けた師でもあった。何しろ私が幼稚園児の時、大学生であった馨兄の角帽を被って、当時の朝日新聞掲載の漫画「フクチャン」の真似をしていたのだから、最初から頭の上がない存在であった。したがって、兄嫁の蕙子姉を通じて追想録に何か書くよう依頼された時、直ちにお受けしたのも、60年近い兄の威圧のお陰であろう。

応用化学を専攻し、数学が必ずしも得意とは思われない馨先生が、実験計画法から推計学、そして品質管理の分野へと進んだのは、戦時中、北九州で石炭を液化して燃料油を製造する仕事を手掛けたことにある。

石炭を処理する実験で、原料石炭の品質のばらつきに悩み、実験結果の解析に統計的手法が必要なことを痛感して勉強するうちに“病膏肓に入った”ものと思われる。

大学で、馨先生から習った実験計画法を会社に入ってから使ってみてガツカリした。実験データをグラフにプロットしてみれば、大体の相関関係は一目で分かる。実験計画法で時間をかけて計算してみても、結果は同じではないかと浅はかにも考えた。しかし実験精度を客観的に数字で示すことの意義がだんだん分ってきた。

馨先生は、原料の品質のばらつきと実験結果を統計的に解析しているうちに、安定した品質の原料を使って再現性のある実験結果や安定した品質の製品を得る品質管理に足を踏み入れることになったのであろう。

戦後、調布で両親と馨兄一家の近くで生活することになり、兄弟皆で酒を飲んで議論をしたり、また説教されたり、父母兄弟でマージャンをしたりした。日曜日には皆で畑仕事を手伝い、馨兄が桶に入れた鶏糞を畑の畝に妙な顔をし

ながら撒いていた姿が、今でも目に浮かぶ。

生前、夜ときどき兄の家へ顔を出すと、掘ゴタツに座って、講義か論文か知らないが、いつも原稿書きに精を出していた。その場に欠かせなかったのが、氷の入ったウイスキーと吸い殻の沢山入った灰皿であった。

兄弟お互いに頑固だと言いつつ合っているが、兄嫁の再三にわたる忠告を聞き入れずに、煙草をのみ続けた馨兄がやっぱり一番の頑固者かもしれない。若し兄嫁の忠告に従って来てくれたら、もう10年くらいは長生きをして、ときどき私に説教をしてくれたらう。
(八弟、三菱化成常務取締役)

6.2 親族が語る

馨さんの「貴様」

氏 家 榮 一

馨さんは同僚・学友・門下生・ご舎弟の皆さんを「貴様」よばわりすることで有名でした。かつてご母堂富美子さまが「貴様」よばわりを耳にされて、馨は威張っているのではないのでしょうか、とひそかに心配されたというお噂を仄聞したことがあるほどでしたが、これは決して倨傲を物語るものではなく、貴様と俺とは同期の桜……の親近感をこめた二人称であった訳です。

2年現役の技術科士官として帝国海軍に職を奉じられた造兵大尉石川 馨の人生に、脈脈と流れる海軍の伝統と申すべきでしょう。

馨さんは昭和14年に、当時最新鋭の重巡洋艦「摩耶」に乗艦実習として乗組みました。私は昭和15年に2年現役の主計中尉として、同じく「摩耶」に乗組みました。終戦時は主計少佐でしたが初級士官で勤務した「摩耶」をなつかしく思います。昭和17年2月11日に妹蕙子が馨さんと結婚して石川家とご縁がむすばれましたが、昭和19年には弟卓也が2年現役主計中尉として「摩耶」乗組みを命ぜられております。

兄弟3人が時こそたがえ、志望したわけでもないのにおびたらしい帝国海軍の艦艇のなかで偶然にも階級が中尉で同じ軍艦に乗組むということは、帝国海軍でも極めて稀にみる例でありましょう。奇しき因縁と感じ入っております。「摩耶」はロンドン条約による最終建艦なので、建造中に軍令部や艦政本部からあれもこれもと追加要求と設計変更を受けて、艦内はせまく入り込んでおりました。

几帳面な馨さんは、茶褐色の技術科士官作業服をまとい艦内帽をかぶって、艦橋トップの主砲指揮所から艦底の機関室まで丹念に踏査して、克明な勤務録を綴り、またガングームでは元気一杯の若い士官達とそれこそお互い「貴様」よばわりで談論風発されたであります。

往時を思い お人柄をしのぶ念 ひとしおであります。

(義兄、七十七銀行取締役相談役)

「お宅の管理職の方は皆お若いですね」

野 崎 二 夫

石川 馨氏の3回忌を機し追想録編纂が企画され、私にも寄稿のご依頼を頂きました。最後まで大学学長としての校務と日本の品質管理・TQC運動へ情熱を燃やし続けられ、世界的に大きな足跡を残された偉大なご業績は、各界の方々からそれぞれの面で語られるであります。

私はこのご活躍の公的な場でのおつきあいは殆んどなくて、石川家のご次男哲君と私の次女和子とのご縁が結ばれた昭和54年から10年ばかりの家族的なご交誼でした。

ほぼ同年代に旧制高校、東京大学、軍隊生活を経て世に出た世代ですので、酒が入れば忽ち旧知の如く、談たまたま共通の友人の名前が出れば、それを肴に蛮歌を歌い、杯を重ねたものでした。子供達の結婚の翌年でしたか、等々力不動尊境内の桜を借景とする我家で、石川ご夫妻と長女の婚家先の日比野ご夫

妻をお招きして花見の宴を張ったことがあります。大いにメートルが上がったとき、石川父上がやおら立上ってベランダの欄干によられ、ハラハラと散りかかる花びらを盃に受け、悠然と呑みほされたご風格は千両役者ともいうべく、ヤンヤの拍手かっさい、大いに盛り上がったもので今も目に浮びます。

また新夫婦の新居が調布のお邸の中に出来上り、お互いの共通の孫を囲み、藤棚の下で、あの立派な庭園を賞でながら祝い酒を頂いた思い出も昨日のように思い出されます。

その頃でしたか、はじめて公人としての石川先生に接する機会があり、その時のことが私にとっては色々の点で印象的なひと幕でしたのでご披露させていただきます。それは私には人生の一転機といたしますか、長く勤めた三菱鉱業の子会社である東京舗装工業の社長を退任、相談役になって間もない時のことでした。切角ご縁ができたこの高名な先生のお話をこの私が育てた会社の幹部社員にも聴かせたいと思い、先生のご快諾を得ました。会社の方へはまたとない機会故できるだけ多くの社員を集めるよう連絡し、段取りは一切現役組に一任しました。

当日会場に出掛けてみますと、相当数の人員が集まっていましたが若い社員ばかり。幹部のヤツらはどうしたと私の方は少々頭にきていました。が、先生は極めて懇切丁寧に日本の経営論から TQC 運動の真髓をお話し下さり、一同深く感銘した次第でした。

ところがです。閉会后司会の総務部長と3人だけになった席で、先生がポツリと一言「お宅の管理職の方は皆お若いですね」と。返事に窮した部長が当社は職場が分散し、仕事に追われて集めにくい幹部や中堅社員の代りに、新入社員を全部集めましたと内情をお話しましたが、もちろん先生はそんなことは百もご承知の上でのユーモラスなご挨拶であり、私はもう穴へも入りたい気持。この活動について全般的に関心の薄かった私自身を含めこの業界への頂門の一針と深く反省したことでした。しかし、その後若い連中が熱心になり、今では社内に QC グループの組織ができ社長も極めて熱心と聞き、これまた感慨。些事ながらご遺徳の一つとして一筆しました。（次男哲義父、三菱マテリアル社友）

6.3 父を思う

「子供は3人作って1人は海外へ」

石川 忠

エンジントラブルのため、一日遅れたフライトがサンパウロに到着したのは真夜中でした。ところが、ホテルに入った私を待っていたのは父が倒れたことを知らせるシカゴからの妻の電話でした。

2年前の当時、私はコマツから米国の小松ドレッサー社に出向してから半年経ち、妻と5人の子供を呼び寄せてシカゴでの生活を始めたばかりのところでした。赴任に先立ち、体調を崩していた父の先行きが気がかりであったため、先生に念を押してから渡米した矢先でもあり、父倒るの報に接し、驚きのみでした。

帰国した時には意識がなく、言葉を交わすこともできなかったのですが、それこそ「いろいろあらあな」とでも言いた気な父の最期であったと思います。

帰宅は遅く、めったに家族と夕食を共にすることもなく、家にいるときは午前零時すぎまでコタツ部屋で仕事をし続けた父でした。仕事一途であり、厳しいところが多かった反面、妻・子供・孫をはじめ、友人を大切に、テレビを見ては涙を流す、気のやさしい父でもありました。

「清濁合わせ飲む」「コンスタント・ピッチ」「子供は3人作って1人は海外へ」、そして「いろいろあらあな」等々、オヤジ語録を思い出す時、我々子供から次の孫の世代に伝えて行かなければならないと思います。

最後になりましたが、今回の父の追想録刊行にあたりましては、お忙しい時間を割いて企画をして下さった編集委員会の皆様をはじめ、ご執筆下さった皆様の暖かいお気持ちがあってこそのものであり、厚くお礼申し上げます。

(長男 コマツ勤務、現小松ドレッサー副社長 米国駐在)

もっとありがとうを言いたかったのに

石川 紀子

父が倒れたという知らせを受けたのは、アメリカへ赴任した主人のもとへ、5人の子供と共に私が渡米してから僅か3週間後でした。

無事出発したね、しっかりやりなさい、という父の声が聞こえてくるような気がしました。

主人と私の人生の中で、大きな岐路が何度かありました。その度に父は、適切な助言を与え、支え、励ましてくれました。書類を前にしてこたつに坐ったいつもと表情の変わらない父の横で、母が微笑みながら父の気持を代弁してくれます。私達の感謝のことばにもただうなずくだけの父を、また母がニコニコとみつめている。そんな情景が、今でもありありと浮かんできます。

父のやさしさと思いやりは、いつもさりげなく、そして大きく私達を包んでくれました。その後押しがあっていつも安心して新しい道へ進むことができたような気がします。

もっともっとたくさんのありがとうを言いたかったのに。それだけが心残りです。

(長男 忠夫人)

パパ 有難うございました

黒川 湛

私と父馨との心の交流が始まったのは、私が裕子(馨長女)と結婚する前の年の昭和43年8月だったと、今でも勝手に思い込んでいます。その年の4月、裕子と私は父とある約束をしました。4カ月間私たちがその約束を守れば二人の結婚を許すというもので、8月はその約束を守り終えた月だったのです。

その日、父に約束を果たしたことを告げると、会いに来なさいと言ってくれました。応接間に通されて緊張して待っていると、忙し気に入って来た父は一言「良くやったな」と右手を差し出してくれました。一生懸命握手をしているうちに、私の心の中で、今までの怖い父親が話せるオヤジに変身してゆき、小さな心の交流を感じたわけです。

それ以後、年を経るごとにそのパイプは太くなり、父が亡くなるまで、約20年の間多くのことを学ぶことができました。

「いろいろあらあな」「下を使って半人前、上を使えて一人前」「聞く耳を持って」「ノムニケーション」などなど、食卓を囲みながら、また酒を飲みながら(実は私が酒を飲めるようになったのも父のおかげだったのですが)、また休みの日など私がやや落ち込んでいたり、怠け心が頭を持ち上げて来た時など、ブラッと父のところに顔を出すと、相変わらず居間でテレビをつけながら原稿を書いている父が、少しの間ペンを置き話をしてくれました。そのたびに勇気づけられたり、目からウロコの落ちる気のすることが数多くありました。

これらの数多くのことを書くことはできませんので、そのうちの一つをご披露したいと思います。

それは父が品質管理を教えに私の会社へ来ることになった時のことです。業界ではQCの大先生ですから私も父の素晴らしい講義を期待し、また反面我社が十分期待に応えられるかとの不安もあり、初日は大分いれ込んで皆と講義に参

加しました。しかし終わってみると何とも拍子抜けするくらい易しい内容でした。

その晩、父のところで「今日は随分易しかったですね」と少し不満気に言うのと、「品質管理と言うとすぐに難しい式が出てきて、難しいことを言う先生が良い先生と思う人がいるが、それでは何の役にも立たない。皆に判ってもらって会社を良くしてゆくことが大事なんだ。またすぐに怒ったり、威張ったりする先生がいるけど、それもダメなんだよ。要はいかに相手に伝えるかなんだ……」と話してくれました。

今、私も1400人の部下を持って、コミュニケーションの難しさを痛感しています。その時にこの時の父の言葉「言ったか言わなかったかではなく、相手に伝わったか伝わらなかったかが重要」を思い出します。

平成元年4月13日早朝、突然倒れ、病院のベッドで、急速に意識を失ってゆく父の耳元で、結婚を許してくれたことから始めて、色々なことを教えてくれたことに対し、万感の思いで「パパ、有難うございました」と大きな声で言いました。多分、判ってくれたと思います。

(長女裕子の夫、日本電気映像メディア開発本部長、日本電気ホームエレクトロニクス映像メディア事業部長)

父の思い出

黒川裕子

父の思い出と言うと、まずこたつに入って、原稿書きをしている姿が目に見えられます。そしてその横には、必ず母が座っていました。その父が逝って3年が経とうとしています。私の中に浮かんでくる父を描いて見たいと思います。
[計画的な父]

父は何事も計画的で、車を買うなら良いものを買って、10年は乗るとというのがモットーでした。我家で初めて買ったワーゲンは、17年、次のセドリックは

10年、随分と色々な所に出かけました。その旅行も出発は何時、どこからどこまで何時間かかり、ガソリンを何リットル給油し、休憩は何分、とドライブしながら全部手帳に記入する父でした。その思い出の手帳は何十冊にもなっています。

[家族マージャンをする父]

父は忙しく、食事もめったに一緒に出来ず、たまに早く帰って来ると、祖母の家から、「馨ちゃん。」の声。マージャンのお誘いです。疲れていても必ず行く父、父にとっては親孝行だったのですが、母や私共にはうらめしいマージャンでした。祖父、祖母、父、叔父とするマージャンは、私達には部屋の近くにも行くことの出来ない家族マージャンでした。

[がんこだけどやさしい父]

父はある面とてものがんこで、家族全員が確かに聞いたことでも、父の「言わない。」の一言で、すべて取り消しになることがありました。また、ある冬に、家族旅行に出かけた時のことです。窓辺にすわり、上半身裸で鳥肌がたっているのにもかかわらず、「寒いから閉めたら。」と言われると、「寒くない。」とがんばるような父でした。

そのがんこな父も、私の結婚では、最初は心配で反対していたのですが、最後にはあっけない程気持ち良く許してくれたのでした。

父の仕事が、あらゆる分野で応用できるため、この3年の間にも、見知らぬ方との出会いの中で、ふと父の名を見聞き、元気なときには知ることの出来なかった父の大きさを感じる今日この頃です。(長女)



家族全員でピクニック 愛車のフォルクスワーゲンで(1956年春)

親 父

石 川 哲

父を思うとき、何が父の行動力の源だったのかと考える。戦後の混乱期、国の復興を志しスタートしたQC。そのQCを、日科技連の方々を中心に、一つの組織としてまとめ得、日本のみならず世界各国への普及に懸命に努力していた父。口は悪かったが、常に人の気持を大切にしていた。また、父は常にチャレンジ精神が旺盛で、QCの話になると生き生きと輝いて見えた。

夜遅く帰宅しても、必ず大好きな風呂に入り、下着一枚で居間の炬燵にどかりと座り、1時、2時までたばこをくゆらせ、グラス片手に仕事ばかりしていた。おかげで居間には常に書類の山があり、母を悩ませていた。原稿を書くにも、几帳面に過去の書類を全て持ち出し、間違いのないようにチェックをしていた。工作中でもテレビはズーとつけっぱなし、仕事に熱中して見ていないかと思うと、これまた、テレビもちゃんと聞いているという器用(?)な一面もあった。この仕事に対する熱意は、父の「QCを通して社会(個人・会社・国・そして世界)を幸福にしよう、良くしよう」と思う心にささえられていたと思う。

このような父と一緒に、居間の炬燵に向い合って座り、父の体験談を聞くのが私の楽しみであり、また勉強でもあった。このレクチャーが、私が社会人になってからも非常に役立ったことは言うまでもない。また、仕事のこと悩みごとなど父にアドバイスを乞うこともしばしばあった。そのような時、父はいつでも感情に走ることなく、データを確認した上での確かな意見を言ってくれたものだ。

父の没後、19年間勤務したダイワ精工(株)を退社、サラリーマン生活に終止符を打ち、新しい事業に向かっている私を父はどう見ているだろう。父が残してくれた多くのアドバイスを通して、私の心には、父の体験、考え方がいつまでも生きている。

(次男)

父のまなざし

石川和子

私達が結婚した頃、両親の家では週末に度々、3人の子供とその家族が集い、賑やかな夕食を囲みました。話も弾み、楽しい団欒の中で、父はウイスキーのグラス片手にタバコを燻らせ、いつも静かに皆の話にうなずき、孫達の様子を、楽し気に眺めておられました。また、夏の軽井沢でも、お盆の休みになると全員、まさに同じ屋根の下での生活を、それは賑やかに楽しく、また慌ただしく送りました。孫が10人ですから、いつも机に向かっていた父にとっては、さぞ騒がしいことだったでしょうが、そうした中でも決してうるさがられることなく、淡々と仕事しておられました。こうした父のおかげでのびのびと大家族での生活を楽しみ育った孫達は本当に幸せだと思っています。また、私達も、父からお叱りや注意を受けたことはなかった様に思います。それも私達全体を考えられての父の思いやりだったのでしょう。父のまなざしのあたたかさが私たちの大きな励みになっておりました。

そんな父の入院は「大腸にポリープが出来ているらしいから切ってくるよ。」の言葉で始まりました。父の回復が遅れ、入退院をくり返すようになったのは、兄の一家がアメリカへ赴任間もなくのころでした。毎日、聖路加病院に通い一日中詰めて、疲れきってもどる母を支えることに、残された家族全員で懸命でした。父が退院してきていたあの朝、緊迫した母からの電話で母屋にかけつけました。倒れた父に必死で人工呼吸をし、救急車で運ばれた病院でも意識のもどらない父に、まるでお互いに分かり合っている様に励ましつづけていた主人のこと、ほとんど睡眠をとる事もできず横に寄り添い父の様子を見守っていた母、反応があるかもしれないと手や足をさすり続けていた裕子姉、今でも鮮明に思い出されます。ただ、ただ父の回復を祈ってそれぞれの家族が心を合わせた日々でした。

これから先、残された者達がいかに支え合いどんな生き方をしてゆくのか、父から問いかけられている様な気がします。私達にとって常に人生の指針を示して下さった父の存在は、今も何等変わることはありません。

父の没後、様々な難題をかかえながら頑張っている主人は、父の問いに答えて一步一步踏み出していると思います。共に私も気持ちを引き締め、頑張らなければと言いきかせている毎日です。(次男哲夫人)



父の作品